

絵でみるペリー艦隊

元練習帆船日本丸船長
元東京商船大学教授

橋本 進

浦賀沖、神奈川・横浜沖に来航したペリー艦隊（黒船）について日本人は絵巻、瓦版、日記などによって当時の情報をいまに伝えています。

また、来航したアメリカ人も写真や石版画、あるいは日記類を残しています。黒船来航は日本人の目にどう映っていたのか。また、アメリカ人の目に映った日本の様子はどうであったか、残された「絵」から検討します。

浦賀沖来航

1853年7月8日（嘉永6年6月3日）アメリカ東インド艦隊司令長官M・C・ペリー提督は、旗艦サスケハナに搭乗しミシシッピ（以上の2隻は蒸気外輪フリゲート艦）、プリマス、サラトガ（以上の2隻は帆装スloop艦）の3隻を率いて浦賀沖に来航しました。その目的は、幕府にアメリカ大統領M・フィルモア（13代）の国書（親書）を手渡し開港を促すことと、江戸防衛ライン（観音崎と富津岬を結ぶ線）を越えて湾内に進入し、アメリカ艦隊の威容を誇示しながら江戸湾の防備状況を探り、あわせて湾内を測量することにあります。わずか10日間の停泊でこの目的を果たしたペリー艦隊は、翌年の再航を告げて江戸湾を去りました。



サスケハナの図（神奈川県立歴史博物館蔵）

サスケハナは「蒸気外輪フリゲート艦」と呼ばれます。フリゲート艦は上下2層の甲板に28～60門の大砲を備えた大型木造帆船のことで今日の巡洋艦に相当するものです。サスケハナは排水量からみればフリゲートの大きさですが、搭載の大砲数が9門なのでスloopではないかという意見もあります。ペリー提督は対外宣伝に「フリゲート艦」としたのかも知れません。

一般に2本マストに縦帆を装備した帆装形式を「スクナー」さらに前部マストに横帆を装備したものを「トップスル・スクナー」といいます。マスト3本で、前部2本のマストに横帆を装備したものを「3マスト・ダブルトップスル・スクナー」といいます。

一般にスloop艦は18～32門の大砲を搭載した木造帆船でシップ型、ブリッグ型、スクナー型がありますが、サラトガは22門の大砲を搭載したシップ型です。今日の砲艦（大砲は数門）をさらに重装備したものです。

シップ型は3本のマストすべてに横帆を装備し、さらに、最後尾のマストにのみ縦帆を備えたタイプです。サラトガの写真からシップ型帆装の特徴がよく分かります。

前図、サスケハナのメインマストに描かれているのは、「ブルーペナント」です。これはペリー艦隊司令長官旗で副司令長官旗は「ピンクペナント」です。当時のサスケハナはペリー艦隊の旗艦であったことがわかります。



ペリー艦隊司令長官旗
と副長官旗



シップ型帆装スloop軍艦サラトガ（船の科学館「黒船来航」写真）



かこ
測量水主（水深測量の水夫）の図（横浜黒船館蔵）

手用測鉛（ハンド・レッド）を持った水兵の図です。測鉛は、普通7～14ポンド（3.2～6.4キロ）の鉛の八角錐で上部には測鉛索（レッドライン）を取り付ける円形孔があり、底部中央には穴（アーミング・ホール）があって、これに獣脂・石鹼類を詰め、測鉛が水底に達したときにその場所の小石・砂・泥などを粘着させて引き揚げ、底質の種類が分かります。錨を入れるときに大切です。測鉛索の長さは25～30ファズム（約45～55メートル）で、水深を知るためのマークが付いています。



ペリー艦隊浦賀沖測量の図 (W. ハイネ)

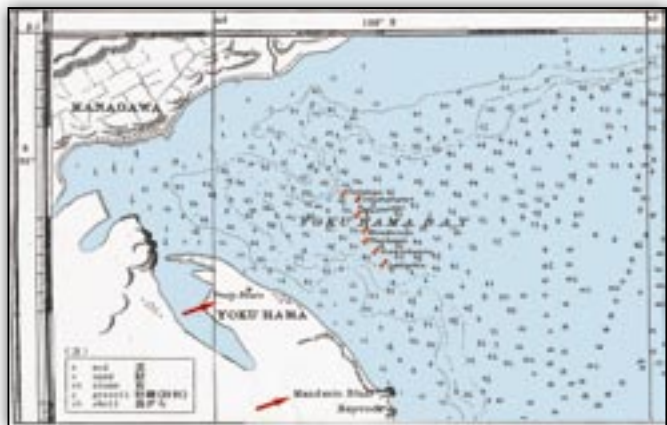
が必死の覚悟で観音崎・富津岬を結ぶ江戸防衛ラインの観音崎を突破したすぐの岬です。この地名には、古代ローマ共和制末期に「骰子は投げられた」と元老院令を無視してルビコン川を渡りポンペイウス討伐の軍を進めたジュリアス・シーザーと同じ思いが込められているのです。

横浜沖来航

1854年2月8日(安政元年正月11日)ペリー艦隊は予告どおり来航し、前年すでに測量を終えアメリカ錨地と名付けていた神奈川宿の南、金沢沖に停泊しました。艦隊の構成は旗艦サスケハナ、ポーハタン、ミシシッピ(以上の3隻は蒸気外輪フリゲート艦)、マセドニアン、サラトガ(以上の2隻は帆装スloop艦)、サザンプトン、レキシントン、バンデーリア、サプライ(以上の4隻は帆装輸送艦)の9隻で構成されていました。幕府とペリー提督の交渉地は神奈川宿対岸の横浜村と決定したので、艦隊は金沢沖から横浜沖に移動しました。1854年2月18日ペリー提督は旗艦をサスケハナからポーハタンに移しました。司令長官旗「ブルーペナント」はポーハタンに、サスケハナには副司令長官旗が掲揚されています。(ペリー渡来絵図帖交屏風より、東京大学史料編纂所蔵)



旗艦ポーハタン(左)とサスケハナ(右)の図



ペリー艦隊横浜沖錨泊地

岬)は小港町付近になります。右下の図は現在の横浜港にペリー艦隊の錨泊位置を記入した照合図です。ペリー艦隊は、横浜ベイブリッジ南詰め西側沖から新子安方向に約1.6キロ、条約館から約2.6~2.8キロの距離に展開していたことがわかります。

W.ハイネの描いたペリー艦隊浦賀沖の測量図です。この図は水深測量の方法を適格に描いています。ボートのへさき(艇首)に立つ水深測量の水夫は、まさに測鉛を投入するところであり、とも(艇尾)では経線儀(セオドライトまたはトランシットともいう)を構えて著名な陸標の方位を測定中の測量士の姿を描いています。さらに、へさきに白い旗が描かれていることも見落としてはなりません。

下図の「CAPE KAMISAKI」は観音崎のことでしょう。「Pt. Rubicon」(現・走水漁港北側の旗山岬)は、ペリー提督



観音崎付近拡大図(1854年のペリーの海図)

1854年3月31日(安政元年3月3日)日米和親条約(神奈川条約)が調印されました。

左下の海図は『ペリー艦隊日本遠征記』第2巻収録の横浜湾(YOKU HAMA BAY)部分の拡大図です。図中、横浜湾の「錨マーク」はペリー艦隊の錨泊地、「Treaty House」(条約館)は日米条約交渉が行われた場所で現在の横浜開港資料館付近です。「Mandarin Bluff」(マンダリン

Bluff)は現在の横浜港にペリー艦隊の錨泊位置を記入した照合図です。図中、横浜湾の「錨マーク」はペリー艦隊の錨泊地、「Treaty House」(条約館)は日米条約交渉が行われた場所で現在の横浜開港資料館付近です。「Mandarin Bluff」(マンダリン



現在の横浜港とペリー艦隊錨泊地